



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 12 号
令和3年3月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

最後の授業

校長 富田 敦

「卒業式では呼名の時にしっかりと返事をし、大きな声で歌を歌って卒業してほしい」

これは、第3学年主任 榎本 裕一 教諭が、当時入学したばかりの赤学年の生徒（現3年生）に話したことです。これを目指して先生方は子どもたちを育み、生徒は先生方の教えを糧として成長してきました。

3月15日、第25回卒業式を行います。この卒業生は新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、3か月にわたる臨時休業を経験し、学校総合体育大会の中止、7月から3月に延期していた修学旅行の中止を受け入れざるを得ませんでした。こんなに我慢を強いた生徒たちは、かつてありません。

「卒業式は中学校生活『最後の授業』です」と榎本教諭は続けます。逆境を前向きな姿勢で乗り越えてきた3年生を私は誇らしく思います。最後の授業「卒業式」では明るく伸びやかな返事をして卒業証書を受け取り、心のこもった歌声を残して土呂中学校を巣立っていくことを期待しています。

先日、卒業を迎える3年生に 秋山 透吾 生徒会副会長は次のようなメッセージを贈りました。「僕たち2年生は、入学してからただ先輩の背中をひたすら追いかけるだけでした。しかし、僕たちが2年生になり「先輩」という立場になってみて、3年生のすごさにたくさん気づくことができました。例えば、『部活で人をまとめるのがこんなに大変だったとは知らなかったこと』『後輩に物事を教えるのがとても難しかったこと』など、改めて先輩方のすごさに驚きました。それとともに、先輩を見習い『自分も後輩にとってよいお手本となる先輩にならなくては』と思いました。先輩方、来年度は僕たち2年生が率先して土呂中学校を動かしていきます。部活動や委員会、行事などでも一生懸命取り組みます。失敗を繰り返してもめげずに取り組みます。」

全国高等学校ラグビー選手権大会に出場した昌平高校 黒崎 慎之助くん、武藤 羽琉くんが母校土呂中を訪れ、話を聞かせてくれました。

黒崎くん「ポジションはセンター、主将という重責を任されました。夢であった『花園』では、感謝の気持ちをもって試合に臨みました。入学当時は部員の中でも一番下手で、監督にもそう言われていました。1年前、肩を脱臼するケガをしてしまい、手術をしました。8月までの約半年間練習に参加できない期間がありました。緊急事態宣言中でもあったため、病院にも行けず、リモートでリハビリをしました。これも辛かったです。主将という立場でもあり本当にしんどかったです。でも、あきらめずに向上心をもって毎日の練習に取り組みました。『花園』では初戦は勝ったのですが、その試合でケガをしてしまい、次の試合には出ることができず、チームもそこで敗れてしまいました。『あきらめなければ夢はかなう』今は、こう思います。4月からは大学でラグビーを続けます。1年生からメンバーに入れるようにケガを治し、練習に取り組んでいきます」

武藤くん「ポジションはウイング、ボールが仲間の手を通り、最後に自分の手にわたってインゴールまで走り抜けることができる最高に気持ちよいポジションです。しかし、花園の直前の練習試合で左ひざの前十字靭帯を痛めてしまい、夢であった『花園』ではプレーをすることができませんでした。本当に残念でしたが、サポートメンバーとして『花園』に立った時、なぜかとても緊張しました。『花園』はそういう場所でした。私は高校入学当時は、足が速いわけではありませんでした。だから、毎日体づくりをし、フォームを研究しました。この積み重ねでウイングとしてのスピードが身についたと思います。私も大学でラグビーを続けます。まだリハビリ中なので、入学後もしばらくは練習に参加できません。でも、苦しいリハビリも乗り越えます。私もラグビーが好きで、楽しいからです。大学で黒崎主将のチームと対戦することが楽しみです。」第25回卒業生もこのあとに続きます。この卒業生のハートはすでに鍛えられています。